魚津城ゆかりの地

ガイドブック

魚津城

旧魚津市街地の中心部に位置する平城で、伝承では建武 2 年（1335 年）椎名孫八入道によって築城されたと伝わるが定かではない。

室町時代には松倉城の重要な支城で、城跡の様子は天明 5 年（1785 年）の「越中魚津町惣絵図」に描かれており、これによると、本丸とそれを三方から囲む二の丸からなるが、二の丸はもとは四方を囲むものであったと推定されています。

魚津城は北陸道の押さえとなる一方、松倉城への主要ルートと考えられる角川の河口に位置する海陸の交通の要衝でもありました。戦国末期になると、松倉城に代わって新川郡の中心地となり、ここをめぐって幾多の戦闘が繰り広げられました。天正 10 年（1582 年）から天正 11 年（1583 年）にかけ、織田勢が上杉方を制して以来、佐々成政、次いで前田利家の支配下となり、江戸時代初期には廃城となりました。

しかし、枢要の地にあることから加賀藩は米蔵や武器庫を置いて万一に備え、周囲に郡代所や奉行所などを配したので、魚津町は近世城下町として新川郡の政治・軍事の中心として繁栄しました。

明治初期ごろまで堀や土塁などが残されていましたが、のちに破壊されて当時を偲ぶものは何もありません。現在、その跡地には大町小学校が建っています。

魚津城の戦い

天正 10 年（1582 年）3 月、小島職鎮が上杉方に呼応して一揆を起こし、織田方の将が守る富山城を奪いました。これに対し織田信長は、即座に柴田勝家らに兵を出させ、富山城を取り戻しました。織田方は、その勢いをもって、上杉方の数倍の軍で魚津城に攻撃を開始しました。この攻撃に劣勢となった魚津城将たちは、同月 23 日、景勝の側近である直江兼続宛てに、救援要請と落城間近で決死の覚悟であることを訴えたといいます。

「魚津在城衆十二名連署状」山形大学附属図書館蔵

その後、5 月 6 日、魚津城二の丸が落とされ、9 日には弾薬が底を尽きます。景勝が援軍を率いて天神山城に布陣したのは、さらに後の 15 日です。しかし、織田方は、土塁や柵、深い堀を築いており、上杉方の援軍の魚津城への救援は妨害されました。その間も、織田方は、信濃・上野方面から上杉方の本拠地である越後春日山城へ侵攻の動きをみせたこともあり、景勝は 26 日に天神山城を撤退し、魚津城は孤立無援の状態となります。

景勝の撤退後、織田方は総攻撃を開始します。魚津城内では兵糧も尽き、魚津城将たちは、敵に降ることを潔しとはせず、自害して果てたといいます。こうして、魚津城は 6 月 3 日に落城しました。

悲劇的な結末を迎えた魚津城の戦いですが、時を同じく、天下の情勢に大きな変動がありました。6 月 2 日に「本能寺の変」が起こったのです。

天下を目の前にしていた織田信長が、明智光秀の謀反にあい、自害を遂げていたのです。その報告が魚津城にもたらされたのは、落城後の 6 月 5 日以降といわれています。

魚津城ゆかりの地・てくてくウォークラリー

上杉謙信公歌碑と常磐の松

「武士の鎧の袖を　かたしきて枕に近き　初雁の声」

天正元年(1573年)4月に甲斐の武田信玄が病没し、越後の上杉謙信が越中及び加賀の半ばを制圧します。この歌は、ちょうどこの頃、越中に攻めいった上杉謙信が魚津城外にて詠んだものとされています。

初秋、魚津城の地にて鎧をつけたままの上杉謙信が万感の想いを込めて口ずさんだものです。

常磐の松は、魚津城内にあり上杉謙信公お手植えの松と伝えられています。初代の松は、漁師が灯台代わりの目印にしていたというほどの巨木だったと言われおり、同校の校歌の歌詞に「常磐の松の聲（こえ）もさやけく」とうたわれるほどシンボル的な存在として人々に親しまれていました。

しかし、1950(昭和二十五)文化祭の行事期間中に校舎の西館から出火し、校舎の三分の二が焼失した。火災の熱の影響もあってか、常磐の松は枯れ始め、52年3月に切り倒されました。

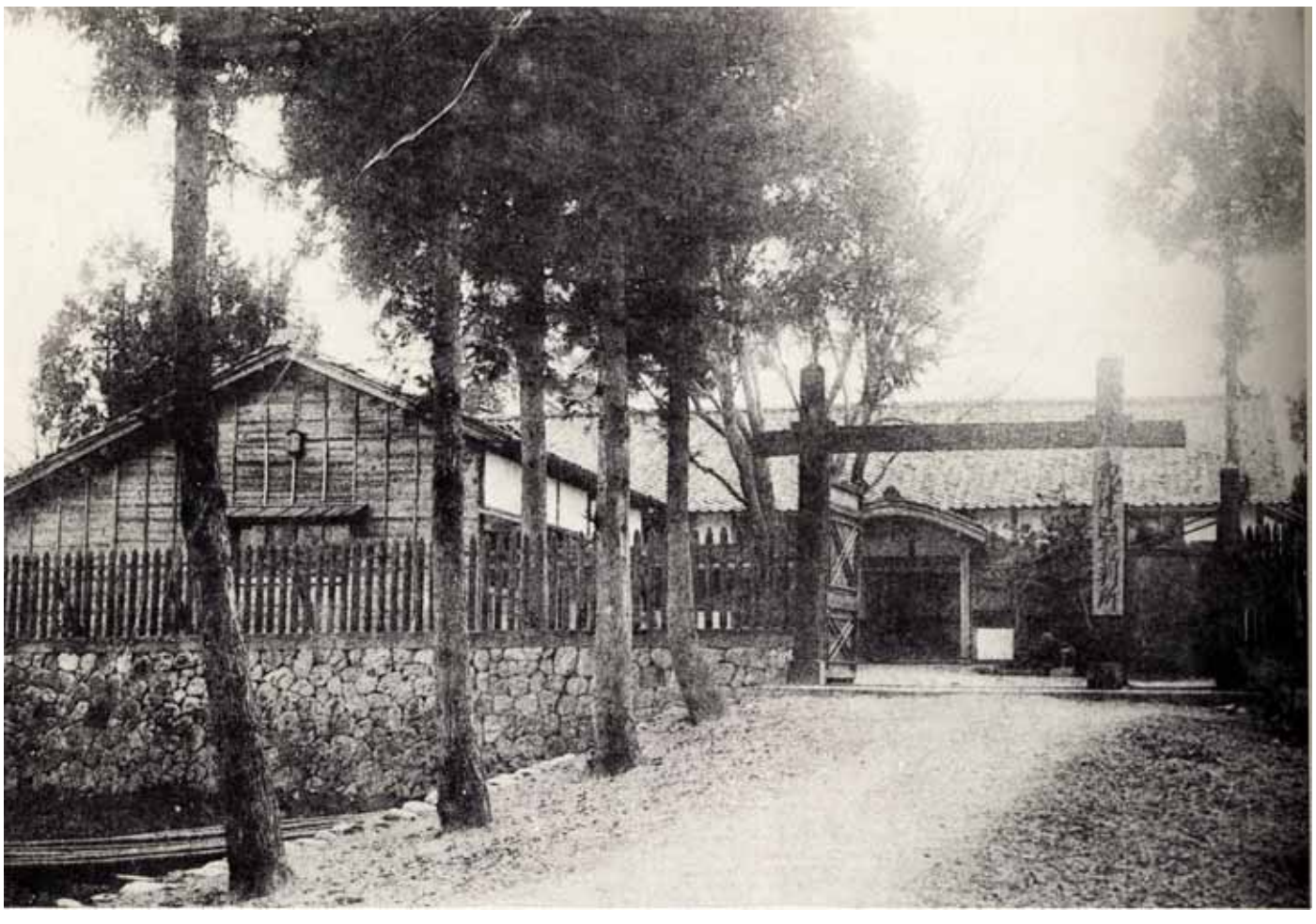
当時の魚津町長や大町小学校長などは、常磐の松を後世に伝え残すために机を作りました。机の天板の裏側の裏書きには「初代常磐の松　亭々（ていてい）として天空にそびえ　そゝろに魚津城を偲（しの）ぶ　常磐の松も一昨秋の　大火から樹勢頓（とみ）に衰え　惜しくもこれを伐（き）り　永くこの名樹をつたえるため机に拵（こしら）え　裁縫室の床をかざることにした　昭和廿七年三月二十日」と書かれています。

現在、グラウンドの隅にある二代目の常磐の松は67年に植樹された松で今も青葉を茂らせています。

魚津城の内堀

魚津城の内堀は、魚津町惣絵図によれば、本丸東西六十間(109m)・南北五十三間(96m)、内堀は、幅二～四間(3.6～7.2m)とあります。

内堀は、現在の大町小学校の校庭を回る道路から大町幼稚園の後方、忠魂碑から裁判所後方、児童玄関から体育館入口を横切りグランド花壇までめぐらされていました。その堀の内に石垣があり、その上に数十本の常磐の松が茂っていたと思われます。



裁判所と魚津城内堀の石垣（明治期）

照顕寺(魚津城主菩提寺)

寺院名　興隆山　照顕寺(馬出町)

宗　　派　浄土真宗　本願寺派

照顕寺は、魚津城の戦い後、天正末年に加賀藩前田家から青山佐渡守吉次が魚津城の初代城主として着任する時に、婦負郡城生村（富山市八尾町城生)にある西勝寺三世の浄祐に魚津城の二の丸に寺地を寄進して菩提寺としたことにはじまります。

魚津城代は、新川郡（富山県東部)を治め、魚津町は、政治・経済・文化の中心として栄えました。照顕寺は、魚津町はもとより黒部・滑川・立山・富山等の民衆からも多くの信仰を集めています。

九世　杳旭住職は、学僧として勧学(本願寺学職の最高位)となり、多くの教義を講じられました。

青山佐渡守親子の墓（天神山）

伏見稲荷魚津大社
(常磐稲荷大明神)

神社名　伏見稲荷魚津大社

御祭神　稲倉魂命

伏見稲荷魚津大社は、戦国時代に魚津城主で上杉家の武将である河田豊前守長親が建立した社と伝えられています。

魚津城の東方の小高い丘に鎮座していましたが、天正年間に起こった椎名右衛門大輔(康胤)と上杉景勝との戦いの際、社殿が戦火にあい毀損しました。元治元年（１８６４年）新川郡代成瀬蔵之助(加賀藩前田家)により再建されました。

稲荷神社は、農業神として広く信仰されていますが、魚津城主が五穀豊穣等を祈願するために建立したものと考えられます。

北海稲荷大明神（春日山）

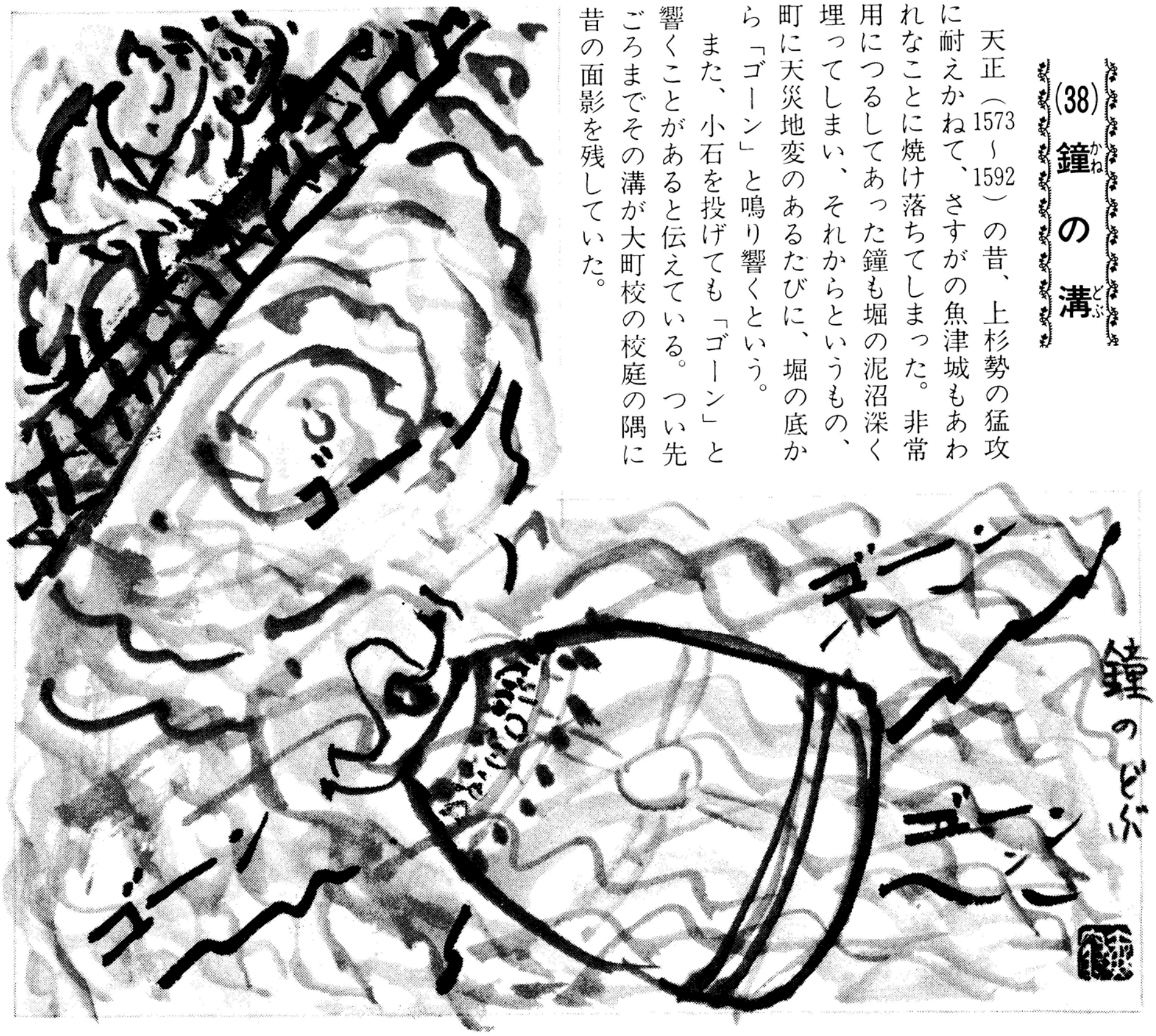
魚津城の伝説

現在、小学校の空地となっていますが、ここには、昭和四十年頃まで魚津城のお堀があり、防火貯水池となっていました。地元には魚津城にまつわる伝説がたくさん伝わっています。

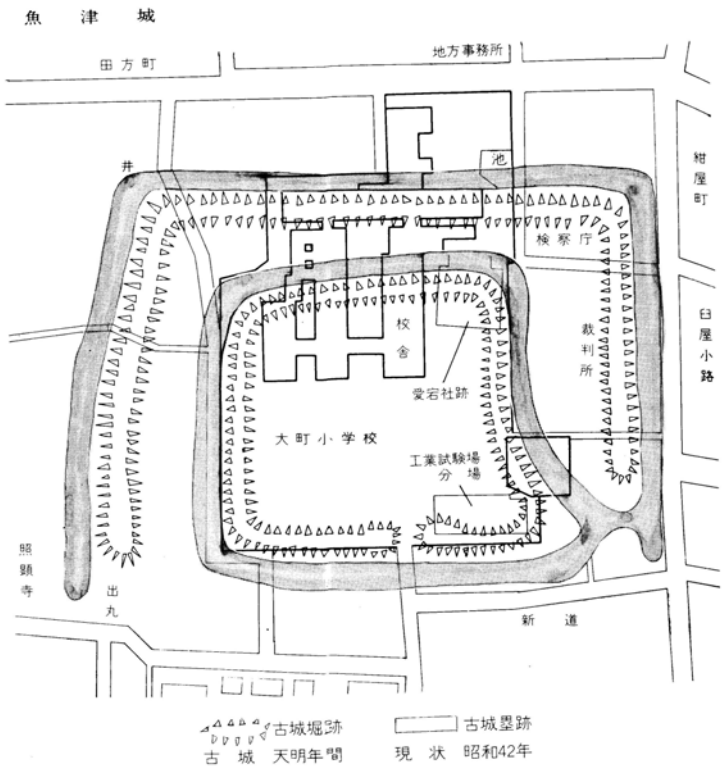
(38) 鐘（かね）の溝（どぶ）

天正（1573～1592）の昔、上杉勢の猛攻に耐えかねて、さすがの魚津城もあわれなことに焼け落ちてしまった。非常用につるしてあった鐘も堀の泥沼深く埋ってしまい、それからというもの、町に天災地変のあるたびに、堀の底から「ゴーン」と鳴り響くという。

また、小石を投げても「ゴーン」と響くことがあると伝えている。つい先ごろまでその溝が大町校の校庭の隅に昔の面影を残していた。



魚津城の二の丸



魚津城の二の丸は、魚津町惣絵図によれば、南北九十六間(１７４ｍ)・東西百二間(１８５ｍ)とあり、二の丸の幅は、十五～二十間(２７～３６ｍ)であったと記されています。

昭和４０年頃の資料によると、裁判所前方から検察庁前方で曲がり、プール後方から職員玄関、的場の水、馬出町の小路を抜け、照顕寺の庭の辺りまでありました。二の丸の石垣の上には、老松が茂っていました。

校舎の後にそびえる二の丸の松

華王寺
(上杉軍将兵供養の寺)

寺院名　華王寺（川原町）

宗　派　古義真言宗

華王寺は、慶長二年（１５９７年）本江村（魚津市本江）の八蓮谷から現地に移転してきました。

境内には四つの塚があり、天正十年の魚津城の戦いにより、自刃した上杉軍の諸将を供養する塚でした。十二諸将は、最後まで上杉家への義を貫いて戦い、自分の名を書いた木札を耳たぶに穴を開けて結び、自刃したと伝えられています。

上杉軍将兵の供養塔(華王寺)

諏訪神社

神社名　諏訪神社（諏訪町）

御祭神　建御名方神・大山昨神

　　事代主神

その昔、魚津の浜（信濃が浜）では豊漁を願って初魚を諏訪本宮(長野県諏訪市)に奉納する習慣があり、神社は、諏訪大社から分霊を奉斎され、越(越中＝富山県)の大社として建立されました。

天正年間、北海の波涛により社地が沖合いとなっていたため、魚津城主 河田豊前守(上杉家武将）により社殿が再建されました。その後、社地が狭くなったため、明治六年(１８７３年)、現地へ遷座されました。諏訪神社境内の玉垣は、魚津城の石垣に使われていた玉石で造られています。

毎年八月に行われる「たてもん祭り」は、江戸時代からの伝統的なお祭りで、国指定の重要無形民俗文化財となっています。

魚津城の玉垣

たてもん祭り(８月)

愛宕社

神社名　愛宕社（中央通り）

御祭神　軻遇突知命

天正年間、魚津城主 椎名右衛門大輔(康胤)が、魚津城内本丸に愛宕社を建立しました。

しかし、天正十年の魚津城の戦いにより魚津城が落城した時に社殿も焼失したため、有志が友道鷹野道に祠を建て遷座させました。

その後、嘉永二年（１８４９年）町奉行 平岡左近により再び魚津城内に建立され、新川郡の火護神として崇拝されました。昭和四十一年 (１９６６年)、大町小学校から魚津神社へ遷座され現在に至ります。

直江兼続公が所用した「愛の兜」の愛の意味には諸説ありますが、最も可能性が高いとされているのは、戦の守り神「愛宕権現」に由来するとする説です。「愛宕権現」の別名として、「愛宕大権現」、あるいは本地仏である「愛宕勝軍地蔵」があげられます。

魚津城内の愛宕社(昭和期)

火祭りの大幣

桃原寺(水噴きの龍)

寺院名　慶谷山 桃原寺（紺屋町）

宗　派　浄土真宗 本願寺派

桃原寺は、慶長年間に慶野から当地(魚津城の外堀付近)に移ってきました。飛騨の名匠の製作になるという山門をくぐって本堂へ入ると、正面の欄間に龍の彫刻があり、「左甚五郎の作」と伝えられています。

この龍は、しばしば欄間から抜け出し付近の泥田で水遊びをして人びとを驚かせたり、龍が水を噴くと必ず火事があるという言い伝えがあります。昭和十年(１９３５年)、龍が水を噴いたという噂が立ってから近所で火災があり、その後また水を噴いてあばれたので、棕櫚縄で縛りつけて動けないようにしたといわれています。昭和十八年(１９４３年)と三十一年(１９５６年)のそれぞれの大火にも桃原寺が焼け残ったのは、この水噴きの龍のお陰といわれています。

水噴きの龍(左甚五郎の作)

長教寺(魚津町奉行所跡)

寺院名　本行山　長教寺（東小路）

宗　派　日蓮宗

江戸時代初期、魚津城代が新川郡(富山県東部)を治めていました。一国一城の制により魚津城は廃城となり、魚津城代にかわり初代魚津町奉行として大音主馬が寛永四年(１６２７年)から魚津町と新川郡を治めることになりました。

万治三年(１６６０年)、魚津町奉行と郡奉行が区別されてからは、魚津町の政治を行うことになり、明治二年(１８６９年)までの二百年余りにわたって魚津町を治めました。

魚津町を描いた江戸時代の絵図には魚津町奉行所は、「町奉行御貸家」と記載されています。

現在の長教寺は、町奉行が廃止になった後、寺町から当地へ移転しました。

長教寺は、大音主馬の菩提寺でもあります。

町奉行御貸家

魚津町奉行所

大町海岸
(蜃気楼の見える海岸)

四月、立山の峰々の雪解けが春の訪れを告げると、ここ大町海岸では、幻想的な「蜃気楼」と青白い神秘的な光を放つ「ホタルイカ」を見ることができます。蜃気楼は、大気中の温度差(=密度差)によって光が屈折を起こし、遠方の風景などが伸びたり、反転した虚像が現れる現象をいいます。

蜃気楼の出やすい日としては、時期(３月下旬～６月上旬)・時間(午前１１時頃～午後４時頃)・気温(１８度以上)・風(魚津の海岸で北北東の微風(おおむね風速３ｍ以下)・天候（移動性高気圧の中心が日本列島の東(三陸沖)に抜けて当日は晴れ、翌日頃から天候が崩れそうな日、等圧線の間隔が開き、強い風が吹かない状態）の条件があります。

永禄７年(１５６４年)に上杉輝虎(謙信)が魚津で蜃気楼を見たという記述が「北越軍談」に記録せれており、蜃気楼を見た最も古い記録といわれています。

蜃気楼（春型）

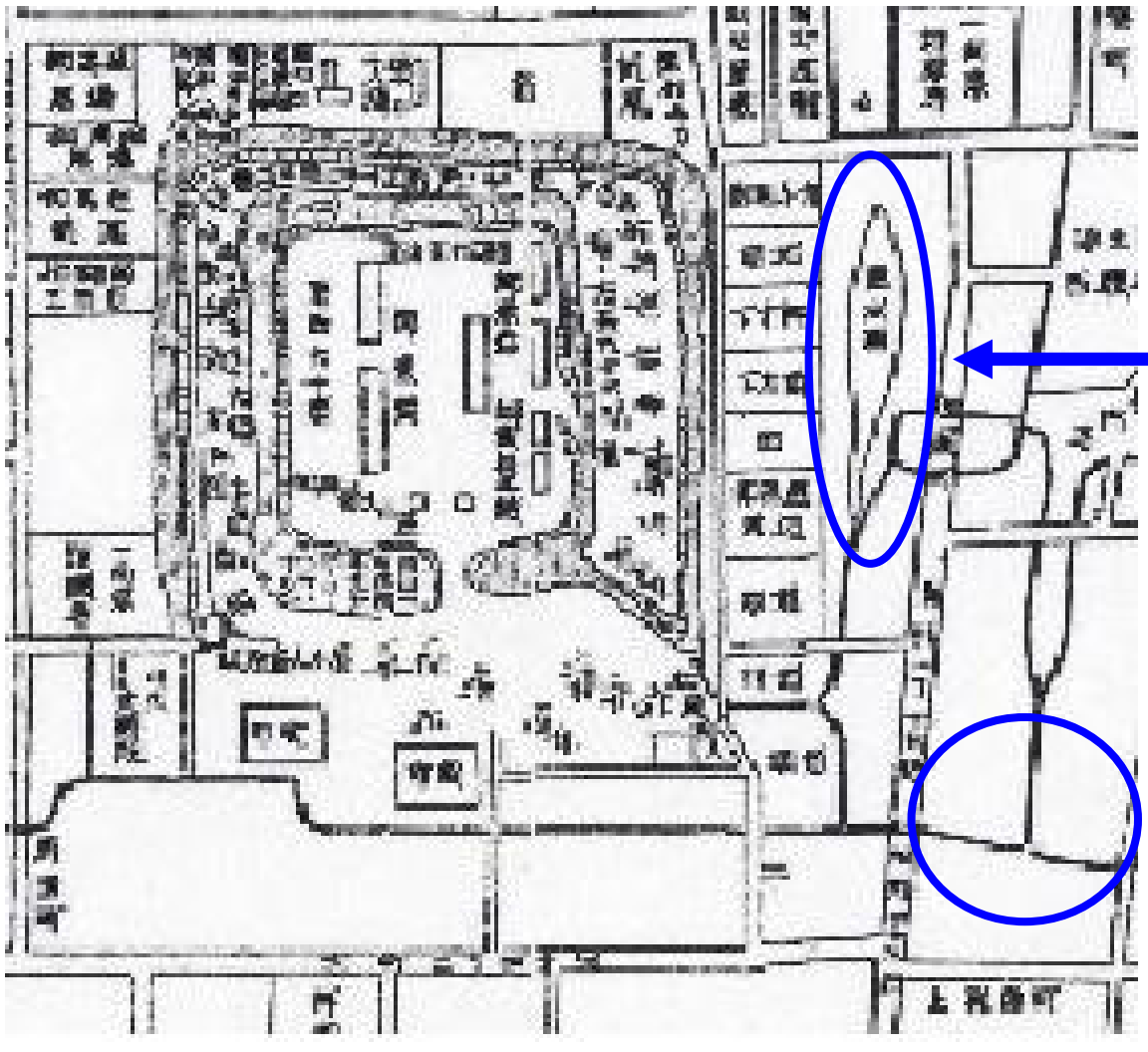
ホタルイカ

魚津城の大堀
(排水路)

魚津城には、本丸の内堀と二の丸の外堀の他にも堀があったと地元では伝わっています。

『魚津古今記』には、「渡辺殿等後紺屋町ノ間拾間斗モ有ルニ是モ古城ノ大堀リトマン」、「延亨年間中迄(１７４４～１７４７年)モ深沼ナルニ今ハ真生茂ル此街道筋ヨリ山ノ方モ其形チ見ヘタリ」とあり、本丸の南に三の丸があって一辺が２５０～３００ｍに及ぶ大堀があったことが記されています。

この大堀は、『嘉永二年魚津町惣絵図』に「悪水溜」として描かれています。ＮＨＫ大河ドラマ「天地人」では、直江兼続が魚津城へ入城するシーンが描かれていますが、魚津城へと繋がるこの大堀沿いを歩いたのかもしれません。



角川(魚津城の川堀)

角川の名前の由来は、能登から鹿がこの地へ渡って来たので鹿途川とつけたと伝わっています。

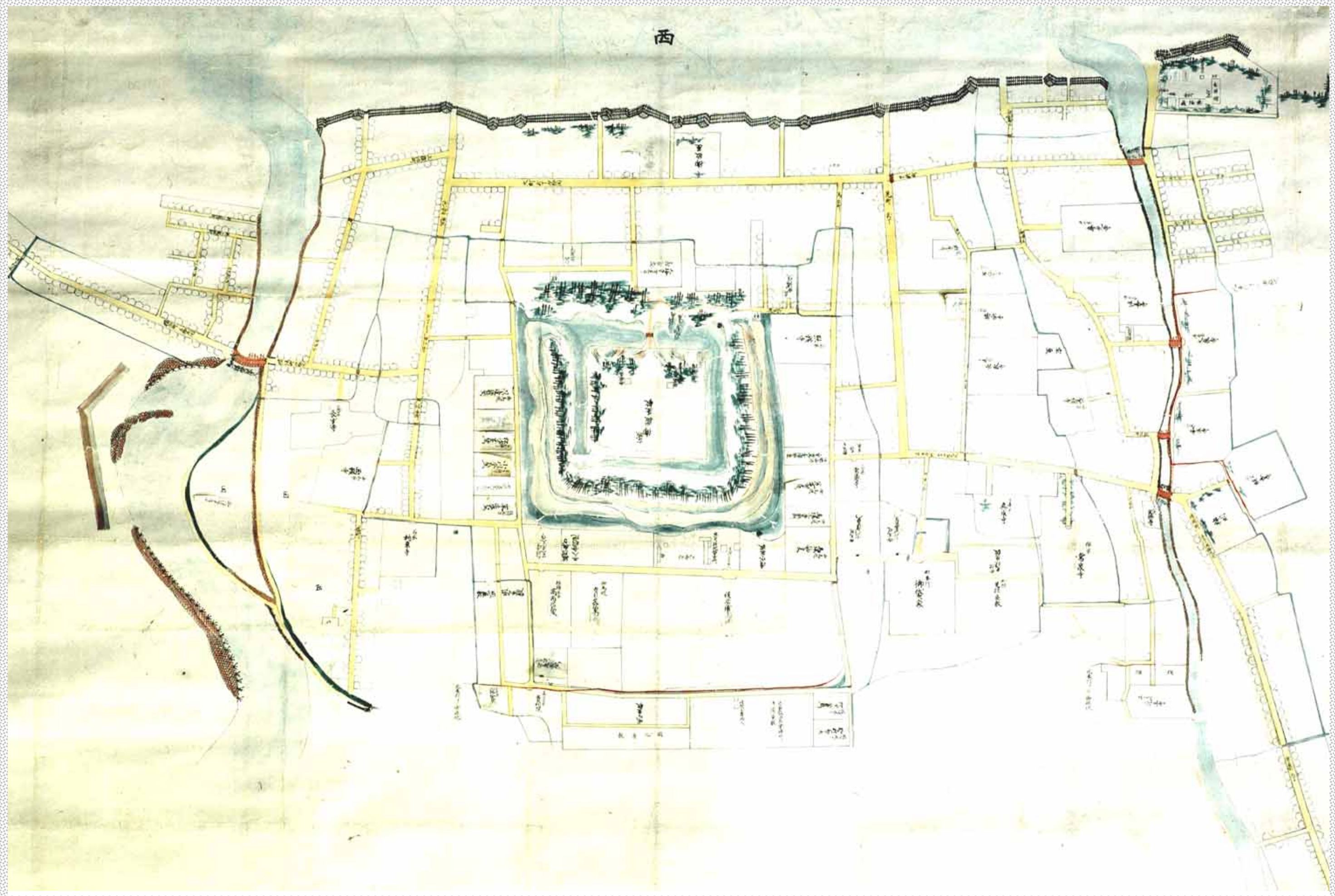
角川の河口には早くから人々が住みつき漁業を営みました。久和氏･髙圓氏は魚津の開祖と云われています。

室町時代の初期に魚津城が築かれ、角川は、自然の要害として魚津城を守るための堀の役割を果たすとともに、本城である松倉城に物資を運ぶための水運の役割もはたしていました。戦国時代の角川は、現在の位置よりもう少し南の方(滑川方面)を流れていましたが、よく氾濫して人々に甚大な被害を与えるため、江戸時代に大規模な治水工事が行われ、現在の位置を流れるようになりました。

角川の流れが蛇行している対岸部分には、魚津城に使われていた基礎石が積まれていると云われています。

角川の小船と万灯台

万灯台


西